

「伝説研究の新潮流」へのいざない

小池 淳一

第五〇回の研究例会は「伝説研究の新潮流」と題して、三人

の方々により御報告いただいた。改めていうまでもなく、伝説は日本における民俗研究の初期からの重要な課題の一つである。各地に伝えられてきた伝説をどのようにとらえるかは、大きな、そして難しい課題であった。固有名詞から距離をおくという周到な方法によって、歴史の贗物とみなされがちであった伝説に対して固有信仰の特色を示すものではないか、という新しい仮説を提示したのが柳田国男であったことはよく知られている。ここでは日本列島上のさまざまな資料を真偽で判断するのではなく、比較によって相互に位置づけ、新たな価値が見出されたのだった。

しかし、伝説の実態に着目するならば、民俗研究史の側からだけの位置づけだけではなく、伝説を受け継ぎ、語ってきた側、その「現場」を意識することも必要ではないか、というのが今回の企画の主旨であった。そこでこの例会では、近年、伝説研究の領域でめざましい成果を挙げている方々に報告を依頼し、

議論に参加していただくことにしたのである。登壇していただいたのは次の方々である。

達志保氏は、徐福が日本に渡来したとする伝説を出発点に、渡来人伝説とそれを伝え、支え、さらに発信する地域社会をとらえようとする作業を重ねてこられた。ここではそうした業績をふまえて伝説の「比較」という問題を単なるモチーフや主人公の類似といった視点ばかりではなく、現代に生きる我々の問題として提起していただいた。

内藤浩誉氏は、静御前という文芸的な女性像を追究するなかで、伝説の表現やそれを支える事物の史の変遷との相関関係を各地の豊富な事例の検証を通して解明する作業を継続されている。今回もそうした蓄積の上になつて、文芸化とそれを促し、あるいは展開させていく仕組みを通して、伝説と「文芸」の関係に新しい光をあてていただいた。

佐藤喜久一郎氏は、文献記録の周到な読み込みと新たな解釈によって、中世以来の上州地方の伝説の様相をラジカルに解説する試みを提出されている。ここでは、山賊という語を軸に伝説と「歴史」との位相を再考し、柳田以来、意識されながらもいささか及び腰であった歴史を語る伝説という課題への新しい提言をしていた。

ここでは紙幅の関係からごく限られた分量での概要を改めて執筆していただいた。研究会当日の報告と比べると分量が少ないのがいささか残念であるが、それぞれの視点と問題提起とは

確実な史資料と丁寧な分析に基づいた斬新なものであり、今後の伝説研究に大きな刺激を与えることを確信している。

これらはさらに、口承文芸研究の内部だけではなく、歴史表象と歴史叙述の危機といった言葉で代表される近年の歴史研究の動向にも大きな示唆を与えるであろうと考えられる。歴史は誰のものか、そして、どのようなシステムで語られ、どういった有効性と射程を持つのか、といった点を自明、無謬のものとして、問い直していこうとしている近年の歴史学の問題意識とも通じる面が少なくない。そのように考えたとき、かつて歴史研究から意識的に切り離された伝説が改めて共通の土俵として浮上してくるのではないか、という期待も生まれる。

既に『国文学―解釈と鑑賞―』誌上では「創造される伝説―歴史意識と説話」と名乗った特集が編まれている（第七〇巻一〇号、二〇〇五年一〇月）。ここでは主として近世史の歴史意識論と民俗学の伝説研究との架橋が試みられている。今回この「伝説研究の新潮流」と題された研究例会とその概要は、伝説そのもの、さらには口承文芸が抱える国際化や伝播及び展開の原因、伝説を繰り返し構築していく社会的要請や言説としての射程といった視点を付け加えていよう。

もちろん、伝説をめぐる研究の次なる課題はここに示された論点で尽きているわけではない。それぞれの伝説をめぐる個々の状況や史資料のありようによって多様に設定しうるであろ

う。ここではこうした問題設定や分析視角を生み出し、支える研究の姿勢や目配りといったものも意識していただきたいと考える。それが活字として改めて「伝説研究の新潮流」を提出するもうひとつの意図である。

現在学としての民俗研究が、担うべき独自の、あるいは、より多角的な姿勢を示すことを意識しながら企画した第五〇回の研究例会が、隣接近似した領域での研究の展開や深化を受け止めつつ、民俗研究の領域をどのようにリニューアルしていくかという問題意識にまで伸びていくことを期待している。味読を乞う次第である。

（こいけ・じゅんいち／国立歴史民俗博物館）